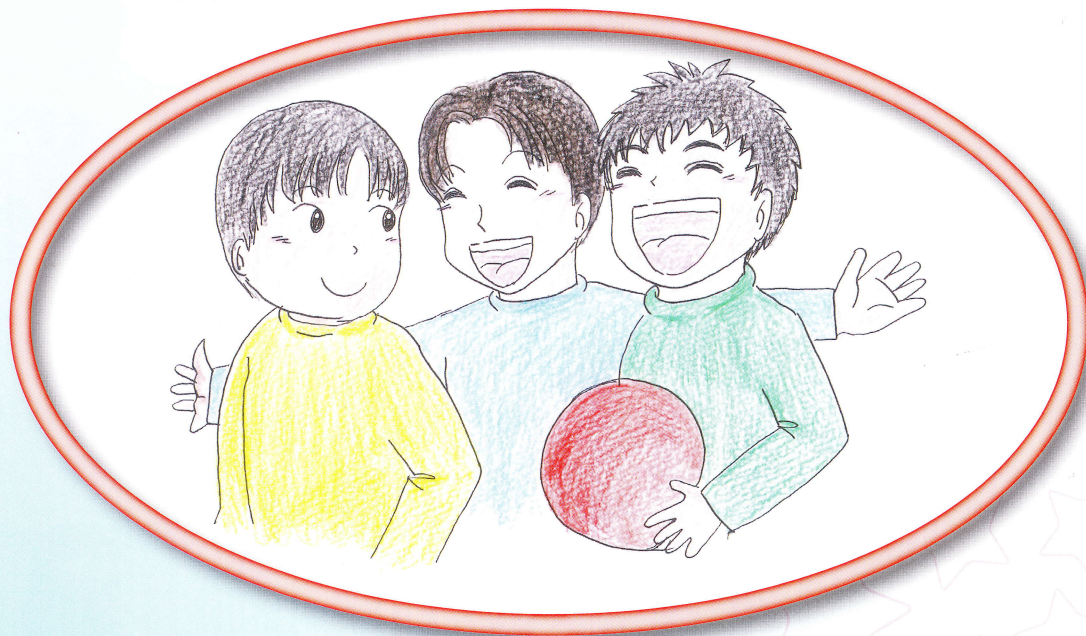


富士見市 道德教材資料



# 大切な友達



富士見市教育委員会

# 大切な友達

「校庭に行こうぜ！」

健太が、ぼくと洋介に声をかける。

健太とぼくは家が近く、小さいころから一緒に遊んでいる。運動が得意な健太は、みんなを笑わせるのがうまく、クラスの人気者だ。友達を作るのがあまり得意ではないぼくにとって、健太はあこがれの存在であり、健太が声をかけてくれることがとてもうれしかった。健太はぼくにとって、大切な友達だ。

洋介とは、二年生のときに同じクラスになった。洋介も運動が得意で、ぼくたち三人は、休み時間になると毎日のようにドッジボールをするようになった。三年生になって洋介は別のクラスになったけれど、今も声をかけ合って一緒に遊んでいる。

今日は、三年生のクラス対抗ドッジボール大会。ぼくと健太がいる一組は、三組に勝利。洋介のいる二組も三組に勝ち、次の一組対二組の勝負で優勝が決まる。

試合は接戦になった。残り時間一分で、内野の人数は同じ。洋介が投げたボールを健太がとる。健太が投げたボールを洋介がよける。ボールがコートをとびかう。

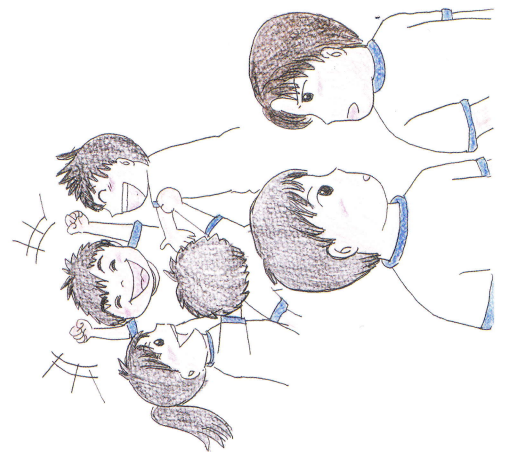
残り十秒、九、八……、ボールをとった洋介がいきおいよく助走をつけ、投げる。受け止めたはずの健太のうでからボールがこぼれ落ちた瞬間、試合終了のふえが鳴った。……負けた。洋介は二組の仲間にかこまれ、ヒーローのようになっている。

その様子を見ていた健太がつぶやいた。

「ちえ、洋介のやつ、あんなに喜びやがって……。おれらに見せつけてんのか。そう思うだろ。」

「……。」

その日の放課後、日直で教室のつくえの整とんをしていたぼくは、いつもより下校がおそくなった。昇降口に行くと、げたばこの向こうに健太のすがたが見えた。健太は上ばきを持って



いる。ごみ箱に近づき、上ばきを<sup>ほう</sup>放りこむと、ぼくには気づかず帰って行った。

ぼくは、ドキドキしながら、ごみ箱の上ばきを拾い上げた。……洋介の上ばきだった。

(健太がこんなことをするなんて……。)

ぼくは上ばきを洋介のげた箱にそつともどした。

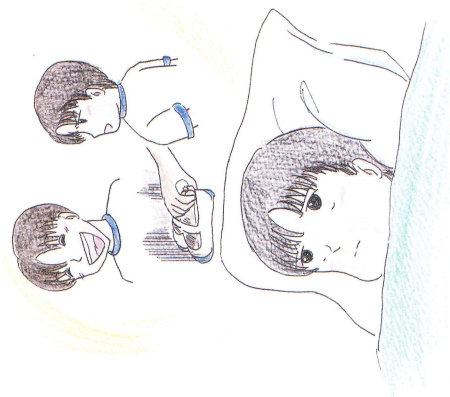
(健太は、ちよつといたずらしただけだよな。)

(気づいているのは、ぼくだけ。上ばきももどしたから  
大じょうぶだろう。)

(でも……。)

帰りながら、ぼくの心の中は、ずっとざわざわしていた。

その夜、ふとんに入ってから、健太の顔が次々と思  
うかんで、なかなか寝つくことができなかった。



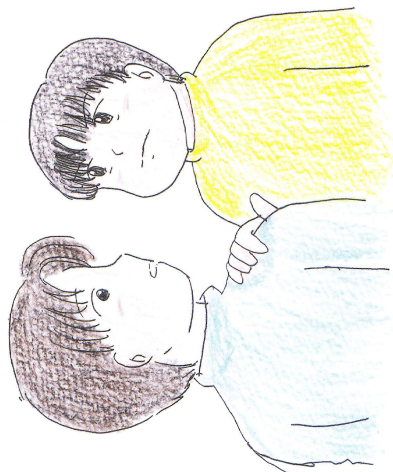
次の日の図工は、『大切な友達』というテーマで絵をかくことになった。真つ先<sup>ま</sup>にうかんだのは、健太だ。

(ぼくの大切な友達……。)

その時、はつとした。ぼくがかきたいのは、笑顔<sup>えがお</sup>で話しかけてくれる健太の絵だ。上ばきをか  
くしているすがたじゃない。昨日の健太の行動は、やっぱり間ちがっている。大切な友達が間  
ちがっていたら、ぼくが止めなくちゃ。

チャイムが鳴り、ぼくは健太のすがたをさがした。ろう下を歩く健太を見つけ、しずかに肩<sup>かた</sup>  
をたたいた。

「健太、あのさ……。」



■作成委員

貴志 祐子 (富士見市教育相談室 専任相談員)  
金子 裕美 (水谷小学校 教諭)  
長島 理史 (関沢小学校 教諭)  
山口 翔子 (ふじみ野小学校 教諭)  
竹内 千尋 (西中学校 教諭)  
伊藤 将瑛 (勝瀬中学校 教諭)  
小峰 夏子 (鶴瀬小学校 教諭) 【挿絵】

■事務局

後藤 輝明 (富士見市教育委員会 学校教育課 指導主事)

■発行

富士見市教育委員会 平成二十九年三月

